房総半島における初期農耕開始期の生業に関する検討

小林　嵩

はじめに

現在、房総半島における初期農耕開始期の土器型式としては荒海式が設定され(西村1961)、鈴木正博や渡辺修一により数多くの研究がなされた。渡辺は荒海３式期に広範な地域で変形工字文が出現すること、雑書文系菱形区画と稲妻状文との融合で新しいタイプの菱形文が出現すること、大型の粗製壺が出現し浮線文浅鉢を継承する浅鉢形土器が消滅するといった土器組成の変革が完了したことを重視し、荒海３式期以降を房総半島における弥生式の開始と捉えている(渡辺2007)。鈴木も弥生式前期は変形工字文系土器群の拡散によって定着したかの感が強いとし、荒海３式期以降を弥生文化期と捉えている(鈴木・荒海貝塚研究会2004)。また、当該期の生業は古くから関心を集めており、馬目順一は狩猟に特化した時期であることを指摘している(西村ほか1965)。鈴木も荒海貝塚などの縄文晩期貝塚の分析から、当該期の荒海貝塚周辺の人々は狩猟専門集団を指向しつつあることを指摘し(鈴木1990)、同様の指摘は小玉秀成によってもなされた(小玉2000)。一方で、古くから荒海貝塚出土とされる土器の底部に籾の圧痕があることが指摘されていたことから(佐藤1971)、房総半島における稲作の開始時期はいつか、という視点からも注目を集めてきた。

本論で対象とする初期農耕開始期(縄文～弥生移行期)の研究は、房総半島に限らず日本列島各地で稲作の開始＝弥生時代の始まりはいつからかという議論に偏重する傾向があったが、現状では「時代」と「文化」が制約なしに混用され、かつ階層の異なる考古資料の区分を比較して「弥生時代」はいつからなのか、という議論がおこなわれている点に問題がある。多くの場合「時代」という言葉を用い、「弥生時代」という概念が適用できる範囲は何処までで、いつから始まるのか、という議論がなされてきたが、高瀬克範が指摘するように、物質文化を取り扱う考古学的な手続きでは、考古学的な文化区分が時代区分に優先するので、時代は用いずに「文化」という概念を用いる。また、高瀬はClarkが提示した考古資料の階層性(下位から属性－人工物－型式－アセンブリッジ－文化－文化グループ－テクノコンプレックス)を紹介し、弥生文化は内部に複数の文化グループを内包するテクノコンプレックス以上の考古学的なまとまりで、稲作を指標として縄文と弥生を区分する際はテクノコンプレックス以上の水準における区分であり、より多くの指標により弥生文化内部を細分する立場は文化グループ以下の水準における区分であるとした(高瀬2014)。現在、本州島の多くの地域に対して稲作を代表とする農耕が始まり、前方後円墳が築造されるまでの期間が「弥生文化」と一括りに定義されるが、地域により多様な文化が存在しているのが実態である。その地域文化がどのように成立しどのように変化するのか、隣接地域とどのような関係があるのか、具体的に検討し、諸現象の背景を具体的に検討する段階に差し掛かっていると考える。本稿では初期農耕開始期の房総半島を対象として、現在縄文・弥生文化と呼ばれている文化の内部を遺跡立地と石器組成や骨角器類、加えて近年データの蓄積が著しいレプリカ法の成果や動物遺存体の情報をまとめて、具体的な文化内容を提示することを目的とする。

１　遺跡立地からの検討

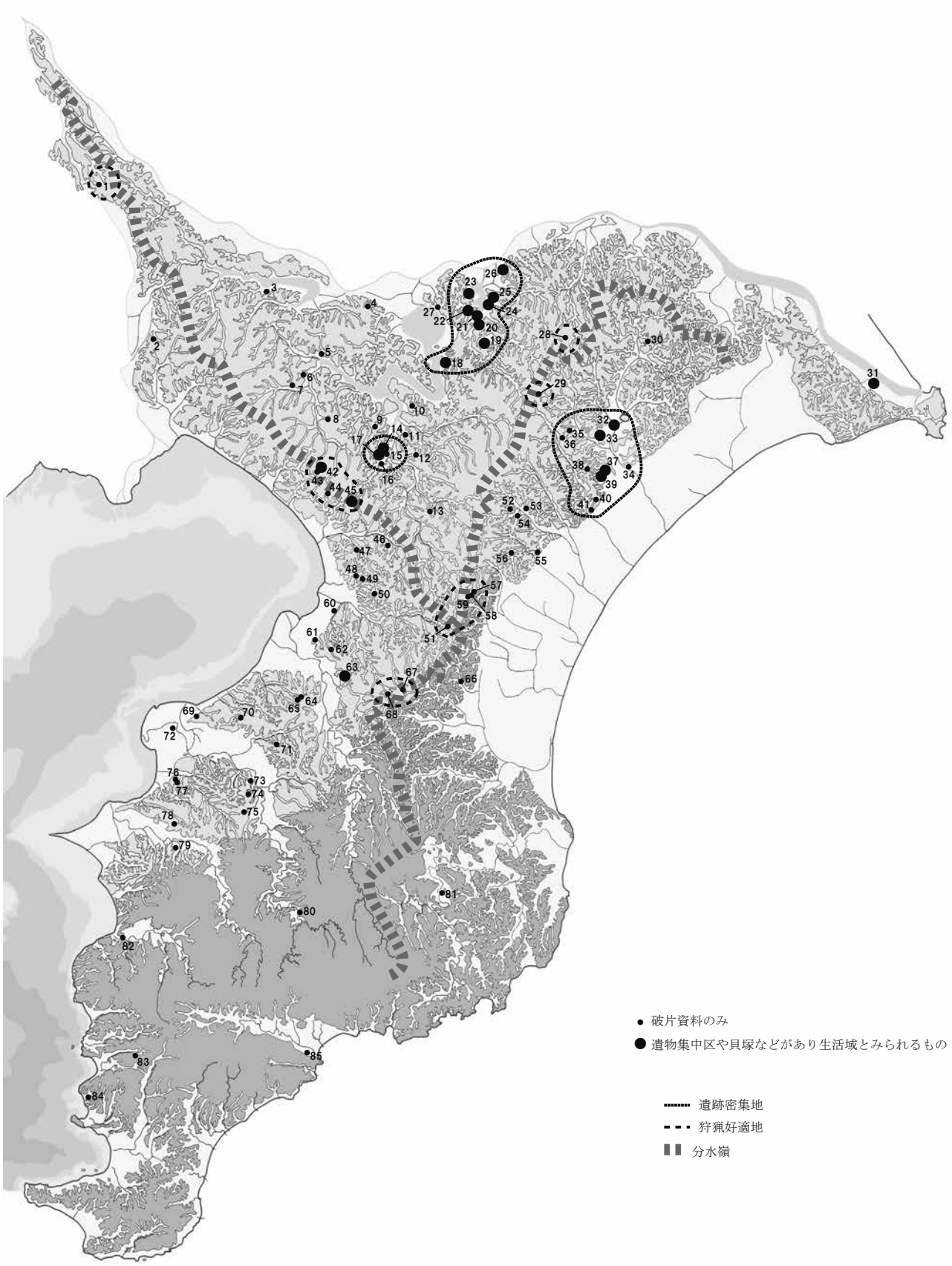
本章では、縄文晩期末葉～弥生前期末葉[(1)]の遺跡立地の特徴を検討する。各報告書を参考にし、分布図を作成した(第１図)。房総半島は旧石器文化期～古代にかけて連綿と人類の土地利用が認められるが、縄文晩期終末～弥生前期末葉という時期[(2)]は、他の時期と比較しても極端に遺跡数が減少する時期にあたる。前段階の縄文後期における房総半島は、東京湾沿岸に多数の大型貝塚が形成されていた。これは東京湾沿岸で利用可能な水産資源や下総台地で獲得可能な動物資源や植物資源に支えられた縄文文化の一つの形態であるが、晩期中葉までには解体し、当該期は遺跡数が激減する。断片的な資料が多いが、遺跡の立地を検討すると特徴的な点をいくつか挙げることができる。以下で当該期の遺跡立地の傾向について検討を加えたい。

（１）　栗山川周辺・長沼低地周辺・都川・鹿島川間

太平洋側の栗山川低地を中心とした地域に遺跡が集中し、山武姥山貝塚(39)・境貝塚(33)・塙台遺跡(32)・長倉宮ノ前遺跡(37)・上仁羅台遺跡(38)などを挙げることができる。これらの遺跡では明確な遺構は検出されないものの、包含層・遺物集中区が検出され、生活域と認識できる。特に山武姥山貝塚では貝層が調査され、チョウセンハマグリやダンベイキサゴといった九十九里近辺で採取可能な貝類が確認でき、貝類の採取が容易な場所を選んで生活域を形成したと考えられる。また、狩猟好適地[(3)]である分水嶺上との往来も容易であり、狩猟と貝類利用に生業の基盤があったとみられる。長沼低地周辺では荒海貝塚(25)・荒海川表遺跡(24)・大野原(龍正院)貝塚(26)、宝田鳥羽貝塚(21)・殿台遺跡(19)など遺跡が集中し、ヤマトシジミ主体の貝層形成が活発である。長沼周辺で採取可能な貝類を活発に採取しており前述した太平洋沿岸域と同様に貝類の採取が容易な場所及び栗山川周辺と同様、狩猟好適地の近辺に生活域を形成したと考えられ、台方花輪貝塚(18)なども同様であろう。また、これらの遺跡は「常総の内海」と太平洋、狩猟好適地への往来が容易という点でも共通している。東京湾と印旛沼を繋ぐ都川・鹿島川間にも御山遺跡(14)や池花南遺跡(17)など遺跡が集中し、まとまった遺物の出土がみられる。この地域も東京湾と印旛沼との往来に適した位置にあり、狩猟好適地にも近接することから生活域としていたと考えられる。また、印旛沼南岸周辺は縄文晩期前葉～中葉にかけての遺跡集中域であり、それらの遺跡が占地や立地を変えて居住活動を継続したことも要因として考えられる(阿部2007)。

第１表　房総半島における縄文晩期末葉～弥生前期末葉の遺跡

1　堤台東寺山遺跡	21 宝田鳥羽貝塚	38 上仁羅台遺跡	52 鷺山入遺跡	68 美佐子遺跡
2　上本郷遺跡	22 下福田ユウガイ貝塚	西長山野遺跡	武藤貝塚	69 山王台遺跡
3　石揚遺跡	23 豊住貝塚	39 山武姥山貝塚	53 西椎崎台遺跡	70 台山遺跡
4　馬場遺跡	24 荒海川表遺跡	40 名城遺跡	野出山遺跡	71 上用瀬遺跡
5　西根遺跡	25 荒海貝塚	41 浅間台遺跡	54 横谷遺跡	72 本郷三丁目遺跡
6　島田込の内遺跡	26 大野原貝塚	42 子和清水遺跡	55 道庭遺跡	水深遺跡
7　本郷台遺跡	27 大畑 I-2遺跡	43 房地遺跡	56 南外輪戸遺跡	73 尾畑台遺跡
8　沖塚遺跡	28 一坪田入 II 遺跡	44 南屋敷遺跡	57 沓掛貝塚	74 林遺跡
9　三拾塚遺跡	29 井森戸遺跡	高津辺田遺跡	大網山田台№4B・6遺跡	75 宮脇遺跡
10 天神前遺跡	30 高宮台遺跡	45 根崎遺跡	58 池田丸山遺跡	76 塚原22号墳
11 大崎台遺跡	31 余山貝塚	46 貝殻塚遺跡	59 上引切遺跡	77 大山台遺跡
12 高崎新山遺跡	32 二ノ台遺跡	多部田貝塚	60 市原条里制遺跡	78 三直貝塚
13 西御門荒生遺跡	塙台遺跡	47 作山古墳群	61 台遺跡	79 鹿島台遺跡
14 御山遺跡	33 境貝塚・境砦跡	48 種ヶ谷津遺跡	62 山田橋表通遺跡	80 坂畑南遺跡
15 小屋ノ内遺跡	34 芝崎遺跡	49 高沢遺跡	63 武士遺跡	81 堀之内上の台遺跡
16 川戸下遺跡	35 居合台遺跡	有吉北貝塚	64 唐沢遺跡	82 花輪上原遺跡
17 池花南遺跡	36 小池地蔵 II	50 小金沢古墳群	山見塚遺跡	83 吉井遺跡
18 台方花輪貝塚	三田遺跡	六通貝塚	65 中伊沢遺跡	84 岡町遺跡
19 殿台遺跡	37 長倉宮ノ前遺跡	51 文六第1遺跡	66 下太田貝塚	85 茱萸ノ木田遺跡
20 宝田八反目貝塚			67 下久保遺跡	



第１図　縄文晩期末葉～弥生前期末葉の遺跡分布

（２） 分水嶺

分布図上に房総半島における分水嶺を示した。分水嶺上に位置する遺跡が少なからず存在し、堤台東寺山遺跡（１）・一坪田入 II 遺跡(28)・井森戸遺跡(29)・沓掛貝塚(57)・池田丸山遺跡(58)・上引切遺跡(59)・文六第1遺跡(51)・下久保遺跡(67)・美佐子遺跡(68)・根崎遺跡(45)・南屋敷遺跡・高津辺田遺跡(44)・房地遺跡(43)・子和清水遺跡(42)を挙げることができる。この分水嶺は下野－北総回廊とも呼ばれ[(4)]、特に下総台地上では谷に降りることなく、平坦な台地上を移動できるルートであり、季節により移動するシカなどの移動ルートとなっていたと考える。実際に動物や石器石材の獲得のために広域に移動していた旧石器文化期の遺跡もこの分水嶺近くに集中し、縄文晩期末葉～弥生前期末葉の遺跡と重複することが非常に多い。この分水嶺上には陥穴が集中することが指摘されており（西野2017・2023）、遺構の性格上時期比定が難しいため確実な縄文晩期末葉～弥生前期末葉の陥穴は検出されていないが、狩猟好適地を選んで形成された遺跡が特徴的である。また、分水嶺上ではないが、鷺山入遺跡(52)・西御門荒生遺跡(13)・小金沢古墳群・六通貝塚(50)・高沢遺跡(49)・種ヶ谷津遺跡(48)・貝殻塚遺跡・多部田貝塚(46)・上本郷遺跡（２）・武士遺跡(63)などは分水嶺上から近く、陸路で往来が可能な立地であり、やはり動物の移動ルートを意識した狩猟に適した場所に形成されている。

（３） 丘陵

房総半島南半部は丘陵・山地形が分布し、この地域全体は房総丘陵と呼ばれている（水谷1997）。このような丘陵・山地形に位置する遺跡が確認され、坂畑南遺跡(80)や吉井遺跡(83)は清澄山山塊、鋸山・富山山塊に位置する。また、房総丘陵西部の上総丘陵南部・上総丘陵西部に位置する遺跡が複数ある。市原市唐沢遺跡(64)・中伊沢遺跡(65)周辺は旧石器時代の遺物や多くの陥穴が検出され、袖ヶ浦市台山遺跡(70)も旧石器時代の遺物が多量に検出されている。君津市鹿島台遺跡(79)では縄文中期後葉ではあるが石鏃製作が盛んにおこなわれ、近辺で狩猟をおこなっていたものと考えられ、狩猟好適地に近かったと考えられる。

以上のような立地の特徴があるが、遺物集中区などが認められ、まとまった遺物の出土がみられる遺跡は栗山川周辺・長沼低地周辺・都川・鹿島川間といった分水嶺などとの往来に適した場所や、貝類利用に適した場所に限られている。ある程度拠点となるような場所が分水嶺＝狩猟好適地からやや離れた場所にあり、分水嶺上に位置する遺跡の大半は破片資料のみ僅かに出土する例が多く、遺構や包含層と呼べるものがほぼなく、定住的な要素が皆無であることから、継続的に居住するというよりは短期間の滞在地という方が実態に近いと考えられ、拠点的な集落は限られていたと考えられる。

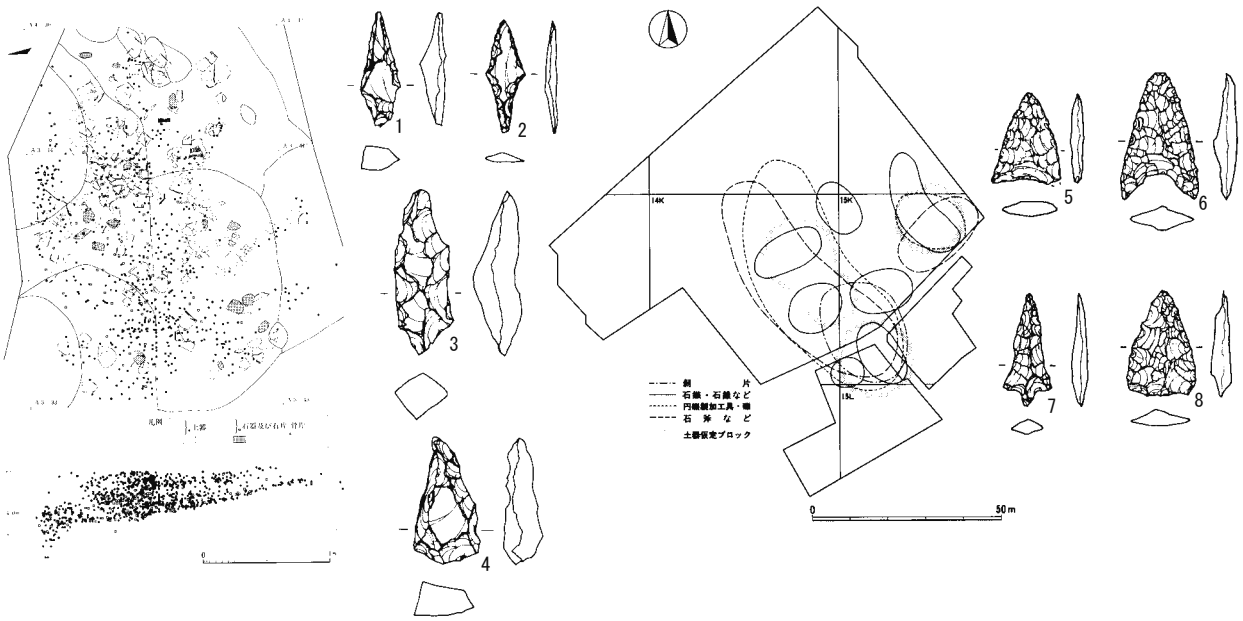
２　石器組成・骨角器からの検討

本章では生業と関わりが深い石器組成や骨角器類から、生業形態について検討をおこなう。

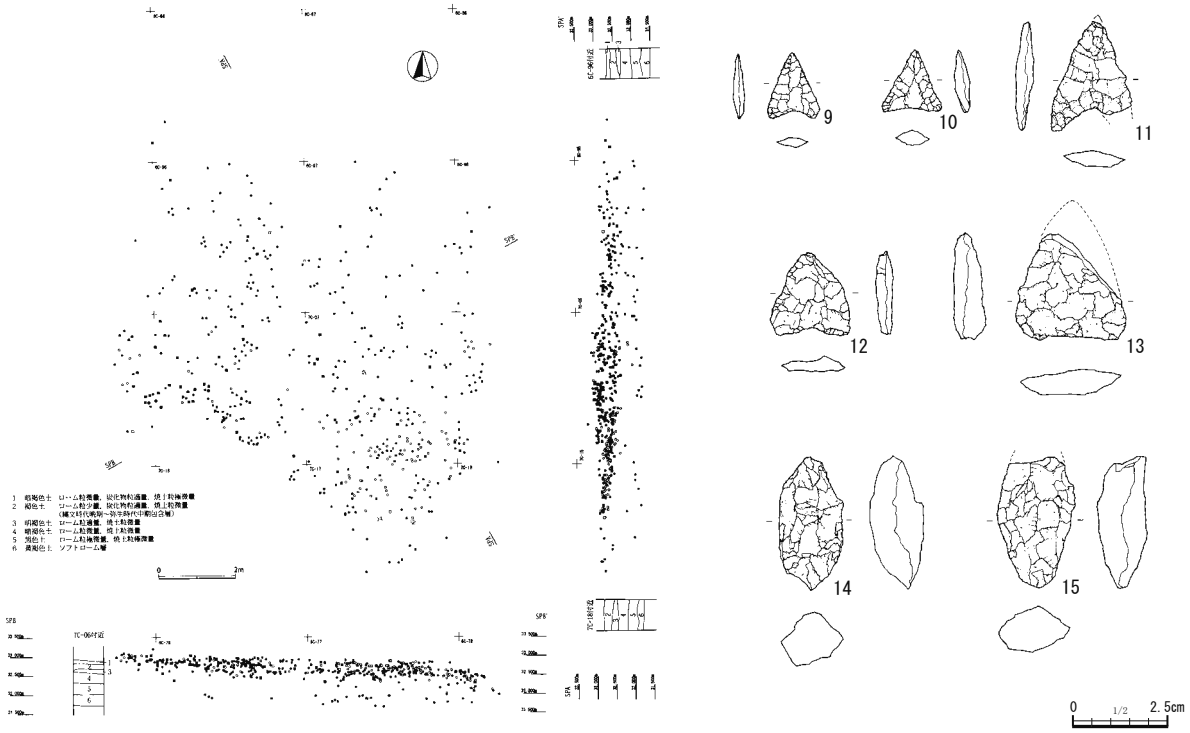
（１） 石器組成

縄文晩期末葉～弥生前期末葉にかけての石器組成の検討は、遺構にともなう例が限られることから時期の特定が難しい。しかし、いくつかの遺跡から石器組成を検討できる例がある。銚子市余山貝塚では、包含層・008・028号遺構から縄文後期～弥生前期末葉に位置付けられる土器が多量に出土し、縄文晩期末葉～弥生前期末葉の資料も非常に多い。これらの包含層・遺構からは時期の限定は難しいものの石鏃や多量の砕片が出土し、狩猟具を含めた石器製作が行われていた可能性が高い（第２図１～４）。四街道市御山遺

跡では、縄文晩期末葉～弥生中期前葉の遺物包含層を中心として、多数の石器が出土している。これらは縄文晩期末葉の土器の分布傾向とほぼ一致し、縄文晩期末葉に属する可能性が非常に高い。石鏃や石槍といった狩猟具が出土し、石器製作もおこなわれていたと考えられる（第２図５～８）。長倉宮ノ前遺跡では、弥生前期末葉を中心とした包含層が検出され、石器も出土しており、ある程度時期を絞ることができる資料である（第２図９～15）。余山貝塚や御山遺跡と同様石鏃や石槍が出土し、やはり狩猟具が出土している。

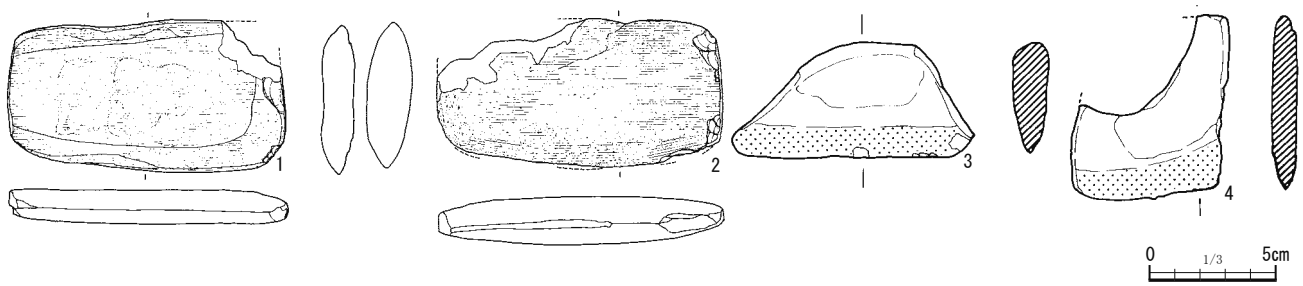


余山貝塚　008・028号遺構　S=1/60　　御山遺跡　包含層　S=1/200



長倉宮ノ前遺跡　包含層　S=1/200

第２図　縄文晩期末葉～弥生前期末葉の石器出土例



第３図　石庖丁状石器(1・2：長倉宮ノ前遺跡　3・4：恩田原遺跡)

また、これらの遺跡からは打製石斧や石鍬などの農具と考えられるものはほぼ確認されていない。農具の一種として、渡辺修一は南房総市恩田原遺跡や長倉宮ノ前遺跡出土の砂岩製の長方形の石器を「石庖丁状石器」と呼称し、穂摘具の可能性を強調している(第３図１～４、渡辺2002、石渡2007)。しかし、これらの石器に明確な穂摘具としての使用痕は認めがたい。渡辺は弥生前期末葉に加工具として対象となる生産用具を想定することができないとするが、骨角器などへの加工具として用いられた可能性はあろう。時期は降るが、同様の形態の石包丁状石器が多数出土した南房総市恩田原遺跡の例は同遺跡から出土した勾玉や石錘製作のための砥石の可能性が高く、農具とするには根拠に乏しい。

（２）　骨角器

製品の出土は少ないが､荒海川表遺跡や荒海貝塚からは鹿角製の刺突具や弭などが出土している。また、擦り切り痕を有する鹿角や骨が多く出土しており骨角器製作がおこなわれていたものと考えられる。このような狩猟具製作が想定され、後述するように当該期の動物遺存体の分析結果を参照すると、大型魚類の出土はほぼ認められないことから、狩猟の対象は魚類ではなく陸生動物であった可能性が高い。これまでの研究でも指摘されてきたように、荒海貝塚からは東北地方からの影響が考えられる銛が出土し(金子1971)、鈴木は外海での盛んな漁撈活動を想定するが(鈴木2009)、房総半島においては具体的な外海での漁撈活動を示す動物遺存体の実例がないというのが現状である。しかし、外海での活動がおこなわれた可能性は十分にあり、それを示唆するものとして荒海川表遺跡で出土したオオツタノハ製貝輪がある。東日本におけるオオツタノハの供給地は伊豆諸島と推定されており、遠隔地からの流通品を持つ点は外海を含めた水上交通との関わりが強い集団を想定できる。

３　自然遺物からの検討

本章では、遺跡に残された自然遺物から縄文晩期末葉～弥生前期末葉の生業形態について検討をおこなう。

（１）　動物遺存体の検討

動物遺存体が豊富に出土する貝塚出土の資料を中心に検討したい。縄文晩期以降は獣骨が多数出土することが古くから指摘されており、やや結論を先に述べるが当該期の動物遺存体はシカ・イノシシが多数を占め、魚骨が非常に少ないという特徴がある。荒海貝塚の調査でシカ・イノシシを中心とする獣骨が多量に出土し、その傾向はその後に蓄積された資料からも裏付けられ、西広貝塚の動物遺存体の分析では、晩期になるとシカ・イノシシの出土数が急激に増加することが指摘されている(金子・牛沢1977)。長沼低地周辺の大野原(龍正院)貝塚でも魚骨が少なくシカ・イノシシの獣骨が多いことが指摘されている(金子・中

村1983)。山武姥山貝塚では、晩期後葉の混貝土層下層から膨大な量の成獣のシカ・イノシシの集積が確認され、集積の範囲内からイヌも集中して検出されたことから、儀礼的な行為がおこなわれた可能性も指摘されている(林・西本1986)。また、余山貝塚の晩期包含層・土坑からは被熱した獣骨が大量に検出され、これも祭祀的な行為の可能性が指摘された(松井1991)。このような傾向は房総半島だけではなく、茨城県土浦市の上高津貝塚からも獣骨が集積された土坑が検出され、埼玉県川口市の精進場遺跡の貝塚でもシカ・イノシシを中心とした獣骨が多いことが報告されている(金子1983)。荒海川表遺跡の調査成果からもシカを集中して捕獲していたことが判明し(山田2001)、近年刊行された西広貝塚の動物遺存体の分析結果を参照しても、晩期以降は魚骨が減少し、シカ・イノシシを中心とした獣骨が増加することが確認された(金子・鶴岡2007)。このように、貝類の利用をしつつ、シカ・イノシシを中心とした動物の狩猟を生業の基盤に据えていた可能性が高く、それは遺跡立地・石器組成からも裏付けられる。

（２）　植物遺存体の検討

古くは荒海貝塚出土の荒海式土器からイネの圧痕が検出され、農耕の存在を示すものとして注目されていた(佐藤1971)。しかし、この資料も後年の分析で木の葉の上から土器に残された圧痕であることから特徴を十分に観察できず、イネと断定することが難しいとされている(中沢・丑野1998)。近年のレプリカ法の普及により圧痕調査が各地で精力的におこなわれるようになり、当該期の具体像が明らかになりつつあるが、その成果を参照すると当該期の房総半島は農耕を積極的におこなっていたとは考えにくい。成果(遠藤2019)を参照すると房総半島における縄文晩期末葉浮線網状文系の土器からはイネ・アワ・キビといった栽培植物が検出されることは非常に稀であることが指摘され、多古町塙台遺跡の包含層出土資料854点の土器片中、圧痕が確認されたのはアワ１点のみで、武士遺跡出土の1154点の土器片からもアワ１点が確認されたのみである。茨城県稲敷市殿内遺跡ではイネの圧痕が検出されているものの13,626点中２点のみであり、縄文晩期末葉～弥生前期末葉までは、農耕の情報は届いているものの、房総半島において積極的におこなわれていたとは考えにくい。また、近年の国立歴史民俗博物館による荒海貝塚の報告によると、遺跡周辺の低地からはイネのプラントオパールは産出するものの、縄文時代晩期末葉～弥生前期末葉の堆積層が残存していないことから、当該期のイネのプラントオパールを証明することは困難であり、残存していたものは平安時代初頭以降のものしかないことが報告されている(吉川ほか2021)。出土資料全点を対象にしたレプリカ法の結果を見ても、タデ科と巻貝の圧痕がそれぞれ１点検出されたのみで(高瀬ほか2021)、炭化したイネの年代測定の結果を見ても、縄文晩期末葉～弥生前期末葉よりも遥かに新しい数値が出ている(宮田2021)。荒海貝塚調査時の資料からは千網式・荒海１式期に比定される多量のイネのプラントオパールが検出されたものの、近年プラントオパールの信頼性が減じている。動物遺存体分析ではコイが多く選択的に捕獲されていると指摘され、水田漁撈がおこなわれていた可能性が指摘されているが(西谷2021)、それ以外の石器類の組成などを見ても、荒海貝塚における稲作については実証的な根拠を示せないというのが現状である。

以上から、房総半島における縄文晩期末葉～弥生前期末葉は、隣接地域では農耕がおこなわれているので農耕の存在を認識し、小規模に実施された可能性や隣接地域から入手していた可能性はあるものの、稲作及び雑穀類の栽培を積極的におこなっていたとは考えにくい。この点は、アワ・キビなどの雑穀類の検出例が多い中部高地方面とは異なる点である(中山2019)。

おわりに

房総半島における縄文晩期末葉～弥生前期末葉(浮線網状文系～荒海４式期)の特徴をまとめると以下の点が挙げられる。

- 土器の組成として壺形土器は限られ、深鉢形・鉢形が主体である。
- 水産資源の利用に適し、狩猟好適地との往来が容易な場所に拠点的な集落を形成する。
- 分水嶺上などの狩猟好適地は断片的な資料が多く、居住域というよりは一時的な滞在地と見られる。
- 石鏃や石槍といった狩猟具が石器組成に含まれる一方で、確実な石製農具とみられるものはほぼない。
- 骨角器類からは活発な狩猟(陸生動物)が想定され、外海も含めた水上交通との関わりも想定できる。
- 動物遺存体の分析結果からは、獣骨が多量に検出される例が認められ、特にシカが多くそれにイノシシが次ぐ。一方で、貝類の利用は一定数あるものの魚骨の検出例が非常に少なくなる。
- レプリカ法の成果を参照するとイネ・アワ・キビをはじめとした栽培植物の検出例がごく僅かで、積極的な農耕をおこなっていたとは考えにくい。

以上から、房総半島における当該期は水産資源を一定程度利用し、僅かな栽培植物は認められるものの、シカ・イノシシを中心とした狩猟にある程度特化し、また外海も含めた水上交通との関わりが強く、拠点的な遺跡はあるものの狩猟好適地などを往来する定住的ではない生活様式を持つ集団の存在が考えられる。このような文化内容は、生業が多様化し環状盛土遺構などを残した縄文晩期中葉までの縄文文化とも異なり、再葬墓を盛んに形成する弥生中期前葉以降の文化内容とも明らかに異なることから[(5)]、上述した特徴を有する文化内容を房総半島における土器型式の名称をとって「荒海文化」と呼びたい。鈴木は現在の根木名川河口に位置した旧長沼における縄文晩期終末～弥生前期にかけての環境変動への適応により、ヤマトシジミ貝塚群の形成を復活させた特定の地域文化を「長沼文化」と呼称したが(鈴木2009)、それをやや拡大した内容となる。

本論で得られた狩猟に特化した文化という評価はこれまでも再三なされてきたが、遺跡の立地や近年蓄積が目覚しい植物遺存体のデータからも補強できたものと考えたい。今回は作業過程として、現在縄文・弥生文化と呼ばれている複数の文化グループの内部をいくつかの指標によって細分し、房総半島を中心に確認できる従来「縄文時代～弥生時代の移行期」と言われていた時期の文化として「荒海文化」を提案した。これは文化グループを構成する一つの考古学的な文化(時期的・地理的に一定の単位をなす要素の組み合わせ)と考えており、今後周辺地域を具体的に検討していく中で同様の文化と捉えられる範囲が広がるのか、あるいは異なる文化が複数設定され上位の文化グループに包摂されるのか、検討していく必要がある。黒沢浩が述べるように、縄文・弥生が実体として存在しているかのような時代名称と一体化した文化名称は一度やめ(黒沢2011)、現在縄文文化・弥生文化と呼ばれている複数の文化グループ内部にある文化の内容を具体的に定義し、各地域・時期の検討を進めていってはどうか、という提案でもある。

最後に、房総半島で確認したような狩猟に特化した集団が出現した背景を予察したい。荒海文化期は、西日本の諸地域では本格的な灌漑水田稲作の導入が始まった時期であり、農耕集落と言うべき集落が出現した。そのような中で、古くは馬目などによって指摘されていたように、生業の分業・専業化が進み狩猟・漁労に先鋭化していく集団が出現した(馬目1988)。それが当該期の房総半島でみられる狩猟に特化した集団であったと考える。それを示す遺物として鹿角製儀器と呼ばれるものがある。鹿角製儀器を分析した川添和暁は、縄文晩期末～弥生中期前葉にかけてみられること、棒状鹿角製品と有鉤鹿角製品の2者がある

こと、出土状況から狩猟・漁撈活動を重要視する集団の存在を示唆するものと評価した(川添2014)。鹿角製儀器は房総半島では荒海貝塚から出土し、その他の地域でも沿岸部を中心に一部山間の洞穴遺跡や岩陰遺跡などに点々と分布している。このような沿岸部や山間部の洞穴遺跡に集中する分布は農耕を生業とした集団の所有するものではなく、川添の指摘のように狩猟や漁労に特化した集団の所有物であろう。鹿角製儀器は、類似した形態のものが広範囲に点的に分布する特徴があるが、このような分布を示す遺物は農耕開始期以降に出現し、弥生文化期以降にみられる卜骨や古墳文化期以降に出現する鹿角製刀剣装具などを挙げることができる。縄文文化期においてもオオツタノハ製貝輪の広域流通といった例外はあるが、広範囲に点的な分布を持つ遺物は基本的にない。山田俊輔は卜骨や鹿角製刀剣装具は、非定住的な集団の所有物と捉え、水上を通じて広域に移動し、漁撈を主要な生業としつつ、動物供犠祭祀や斃牛馬処理、湧水堀などをおこなっていたと指摘した(山田2016・2019)。同様の分布を示す鹿角製儀器が出現したのは日本列島における農耕開始期にあたり、農耕以外の狩猟・漁撈といった生業を選択した集団が所有したものであり、農耕開始とともに始まった生業の分業・専業化を示していると考えられ、今回検討した房総半島における集団もそのような役割を果たしていた可能性がある。

本稿を執筆するにあたり、多くの方々に助言を頂いた。また、資料調査についても多くの機関・方々に多大な協力を頂いた。記して感謝する。勿論、全ての文責は筆者にある。

五十音順・敬称略
植木雅博・岡山亮子・酒匂善洋・田邉由美子・轟直行・西野雅人・山田俊輔・千葉県立中央博物館・南房総市教育委員会

註

(1) 具体的には縄文晩期終末浮線網状文系～荒海４式までの土器が出土した遺跡を対象として集成した。荒海４式が中期初頭まで降るという意見もあるが(渡辺1993・2001)、杉山祐一が指摘するように(杉山2016)、明確な遺構から共伴することがない点、他地域では荒海式と中期初頭の資料が明確に区分できるという指摘(谷口1990、鈴木2003)があることから、荒海４式は前期末葉の土器型式として把握する。

(2) 弥生中期中葉まで遺跡数は極端に減少する。

(3) 分水嶺上は尾根状の起伏の少ない地形であり、冬季に多雪地帯から雪の少ない地帯へ群れで移動する習性をもつシカの移動ルートとなっていた可能性が高く、後述するように旧石器文化期の遺跡や溝形陥穴の分布も集中し、狩猟に適した場所として縄文晩期終末～弥生前期以前から認識されていたと考える。

(4) この名称は生物学者が提唱したものであり(大野1996)、旧石器文化期研究で主に使用される(田村ほか2003)。

(5) レプリカ法の成果によれば中期前葉以降はイネなどの検出率は増加するようである。

図の出典

第１図：各報告書を用いて筆者作成

第２図：1 ～ 4：石橋ほか1991、5 ～ 8：渡辺ほか1994、9 ～ 15：島立ほか2007

第３図1・2：島立ほか2007、3・4：安藤ほか1998

参考文献

阿部芳郎2007「第2節　縄文後晩期の集落構造－「谷奥型環状墳丘集落」と「谷面並列型墳丘集落」の占地と展開－」『「環状盛土遺構」研究の現段階－馬場小室山遺跡から展望する縄文時代後晩期の集落と地域－』馬場小室山遺跡研究会　pp. 57-77

石渡典子2007「第2節　石包丁状石器について」『千葉県山武郡横芝光町　長倉宮ノ前遺跡－国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書Ⅳ－』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第92集)千葉県道路公社・財団法人山武郡市文化財センター　p. 289

遠藤英子2019「関東地方の弥生農耕」『農耕文化複合形成の考古学㊤－農耕のはじまり－』雄山閣　pp. 111-125

大野正男1996「第3節　動物」『千葉県の自然誌』本編1　千葉県の自然(『県史シリーズ』40)千葉県　pp. 185-197

小川和博1978「貝塚測量調査報告」『成田市の文化財』第9輯　成田市教育委員会　pp. 4-20

小川和博1980「貝塚測量調査報告」『成田市の文化財』第11集　成田市教育委員会　pp. 1-42

小川和博1992「成田の貝塚」『成田市史研究』第16号　成田市教育委員会　pp. 65-93

柿沼修平・青木幸一1987「佐倉市生谷三拾塚遺跡出土の土器について」『奈和』第25号　奈和同人会　pp. 54-57

金子浩昌1961「印旛・手賀沼地域の貝塚」『印旛手賀　印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』(『早稲田大学考古学研究室報告』第8冊)早稲田大学考古学研究室　pp. 96-122

金子浩昌1971「第2節　現利根川下流域の縄文貝塚にみる石器時代漁撈の諸問題」『利根川－自然・文化・社会－』弘文堂　pp. 113-132

金子浩昌1983『貝塚出土の動物遺体－関東地方・縄文時代貝塚の動物相とその考古学的研究－』(『貝塚博物館研究資料』第3集)千葉市加曽利貝塚博物館

金子浩昌・牛沢百合子1977「第1節　軟体・脊椎動物遺体」『西広貝塚』市原市教育委員会・市原市国分寺台土地区画整理組合　pp. 443-485

金子浩昌・鶴岡英一2007「第6節　動物遺存体から見た生業活動」『市原市西広貝塚 III』(『市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書』第2集)市原市教育委員会　pp. 1540-1550

金子浩昌・中村若枝1983「大野原貝塚出土の動物遺体」『奈和』第21号　奈和同人会　pp. 57-62

川添和暁2014「縄文／弥生移行期の鹿角製儀器の二者－棒状鹿角製品と有鉤鹿角製品について－」『古代文化』第65巻第4号　公益財団法人古代学協会　pp. 22-46

黒沢　浩2011「縄文／弥生考－「縄文・弥生移行期」は可能か？－」『論集　縄文／弥生移行期の社会論』伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・前期篇　ブイツーソリューション　pp. 1-20

小玉秀成2000『縄文から弥生へ』玉里村立史料館

佐藤敏也1971『日本の古代米』(『考古学選書』1)雄山閣

杉山祐一2016「再葬墓出土土器の複雑性と地域間関係－千葉県塙台遺跡と周辺地域の検討から－」『古代』第139号　早稲田大学考古学会　pp. 3-40

鈴木正博1990「荒海貝塚の社会組織と4I 型抜歯の残照」『利根川』11　利根川同人　pp. 28-33

鈴木正博2003「「脱条痕文縁辺文化」研究序説－弥生式「zigzag 文様帯系土器群」と「脱条痕文」に観る相互作用と「共同の母体」観－」『婆良岐考古』第25号　婆良岐考古同人会　pp. 37-67

鈴木正博2009「生粋の「長沼文化」－「荒海海進」による汽水系貝塚群出現の背景－」『利根川』31　利根川同人　pp. 30-41

鈴木正博・荒海貝塚研究会2004「弥生式前期「荒海3式」の型式学的射程－「変形工字文系土器群」の変容に観る新たな文様帯の生成－」『日本考古学協会第70回(2004年度)総会　研究発表要旨』日本考古学協会　pp. 89-93

高瀬克範2014「続縄文文化の資源・土地利用　隣接諸文化との比較にもとづく展望」『[共同研究]農耕社会の成立と展開－弥生時代像の再構築－』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集)一般財団法人国立歴史民俗博物館振興会　pp. 15-61

高瀬克範・守屋　亮・設楽博己2021「第5節　レプリカ法による土器圧痕の調査」『[特定研究]日本歴史における地域性の総合的研究－古代東国の地域的特性　千葉県荒海貝塚の発掘調査』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第227集)国立歴史民俗博物館　pp. 367-368

谷口肇1990「「堂山式土器」の再検討」『神奈川考古』第26号　神奈川考古同人会　pp. 63-97

田村　隆・国武貞克・吉野真如2003「下野－北総回廊外縁部の石器石材(第1報)－特に珪質頁岩の分布と産状について－」『千葉県史研究』第11号　千葉県　pp. 1-11

中沢道彦・丑野　毅1998「レプリカ法による縄文時代晩期土器の籾状圧痕の観察」『縄文時代』第9号　縄文時代文化研究会　pp. 1-28

中西克也・中野修秀・處毅1987「千葉県長柄町美佐子遺跡の研究－上総における縄文時代後・晩期の一資料－」『奈和』第25号　奈和同人会　pp. 43-53

中山誠二2019「中部高地における縄文と弥生の栽培植物」『農耕文化複合形成の考古学㊤－農耕のはじまり－』雄山閣　pp. 127-140

奈和同人会1987「－下総における縄紋時代晩期終末の研究3－成田市宝田鳥羽貝塚の調査」『奈和』第25号　奈和同人会　pp. 22-39

西野雅人2017「下総台地における縄文の狩猟活動解明に向けて(1)」『千葉縄文研究』7　千葉縄文研究会　pp. 113-128

西野雅人2023「南関東地方における縄文時代早期の様相」『更新世末期から完新世初頭における遊動的狩猟採集民』予稿集　岩宿博物館　pp. 65-74

西村正衛1961「千葉県成田市荒海貝塚－東部関東地方縄文文化終末期の研究－(予報)」『古代』第36号　早稲田大学考古学会　pp. 1-18

西村正衛1965「千葉県成田市荒海貝塚(第１次調査)」『日本考古学年報』13（昭和35年度）　誠文堂新光社　pp. 105-109

西村正衛1984『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』早稲田大学出版部

西村正衛・馬目順一・原信之・戸田健・江崎武・平野吾郎・大久保進1965「関東地方における縄文式最後の貝塚－千葉県成田市荒海貝塚－」『科学読売』第17巻第10号　読売新聞社　pp. 27-39

西谷　大2021「4　貝・獣骨・魚骨の組成からみた荒海貝塚の生業の特徴」『[特定研究]日本歴史における地域性の総合的研究－古代東国の地域的特性　千葉県荒海貝塚の発掘調査』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第227集)国立歴史民俗博物館　pp. 453-457

林　謙作・西本豊弘1986「縄文晩期～弥生前期の狩猟と儀礼」『環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼』北海道大学文学部　pp. 26-42

松井　章1991「余山貝塚出土の動物遺存体」『銚子市余山貝塚－高田川災害関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(『千葉県文化財センター調査報告』第197集)千葉県土木部　pp. 255-263

松丸信治2007「千葉県成田市台方花輪貝塚の調査－縄文時代晩期・弥生時代初頭貝塚の学際的研究－」『考古学ジャーナル』No. 563　ニュー・サイエンス社　pp. 23-27

馬目順一1988「生業 II（漁撈）」『季刊考古学』第23号　雄山閣　pp. 43-47

水谷武司1997「第3節　丘陵・山地」『千葉県の自然誌』本編2　千葉県の大地(『県史シリーズ』41)千葉県　pp. 31-44

宮田佳樹2021「3　炭化種実の分析」『[特定研究]日本歴史における地域性の総合的研究－古代東国の地域的特性　千葉県荒海貝塚の発掘調査』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第227集)国立歴史民俗博物館　p. 409

山田敏史2001「第6章　コラムサンプルと動物遺存体の分析」『千葉県史編さん資料　成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』千葉県　pp. 21-52

山田俊輔2016「鹿角製刀剣装具の系列」『日本考古学』第42号　日本考古学協会　pp. 21-33

山田俊輔2019「6 ～ 9世紀における、ト骨、ト甲出土遺跡の研究」『古代文化』第71巻第1号　公益財団法人古代学協会　pp. 1-15

吉川昌伸・杉山真二2021「第3節　荒海貝塚・宝田鳥羽貝塚のプラント・オパール分析と花粉分析」『[特定研究]日本歴史における地域性の総合的研究－古代東国の地域的特性　千葉県荒海貝塚の発掘調査』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第227集)国立歴史民俗博物館　pp. 343-356

渡辺修一1993「「荒海式土器」と「須和田式土器」の間」『史館』第24号　史館同人　pp. 23-48

渡辺修一2001「須和田遺跡雑感」『千葉県史研究』第9号　千葉県　pp. 80-89

渡辺修一2002「第4章　石製農具－石庖丁状石器について－」『千葉県文化財センター研究紀要』23　財団法人千葉県文化財センター　pp. 107-123

渡辺修一2007「荒海2式の研究－浮線文直後の土器群－」『千葉県立中央博物館研究報告－人文科学－』第10巻第1号　千葉県立中央博物館　pp. 1-20

渡辺修一・石橋宏克2008「成田市宝田八反目貝塚の発掘調査」『千葉県史研究』第16号　財団法人千葉県史料研究財団　pp. 131-149

報告書

有沢　要・石本俊則・小高春雄1983『道庭遺跡』第1分冊　道庭遺跡調査会

安藤道由・稲葉理恵2001『－千葉県袖ケ浦市－上用瀬遺跡 III』(『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第167集)財団法人君津郡市文化財センター

安藤杜夫・松田政基1998『千葉県富山町　恩田原遺跡　県営ほ場整備事業岩井地区埋蔵文化財調査』富山町教育委員会

飯塚博和・宮内友行1995『堤台東寺山』(『野田市埋蔵文化財調査報告書』第12冊)野田市教育委員会

石塚浩1998『主要地方道成田松尾線 VIII　松尾町名城遺跡』(『千葉県文化財センター調査報告』第333集)千葉県土木部・財団法人千葉県文化財センター

石橋宏克・新田浩三1991『銚子市余山貝塚－高田川災害関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(『千葉県文化財センター調査報告』第197集)千葉県土木部

糸川道行ほか2006『四街道市小屋ノ内遺跡(2)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 IV』(『千葉県教育振興財団調査報告』第557集)独立行政法人都市再生機構・財団法人千葉県教育振興財団

稲葉昭智1990『千葉県木更津市　市内遺跡群発掘調査報告書－伊豆島貝塚・宮脇遺跡－』木更津市教育委員会

稲葉昭智編1994『－千葉県袖ケ浦市－大竹遺跡群発掘調査報告書 III －尾畑台遺跡・内出原遺跡・大竹古墳群・下根岸古墳群－藤田観光ゴルフ場建設に伴う埋蔵文化財調査－』(『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第91集)財団法人君津郡市文化財センター

井上哲朗・安井健一・栗田則久・渡邉修一2023『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書42－芝山町境砦跡－』(『千葉県教育振興財団調査報告』第792集)東日本高速道路株式会社・公益財団法人千葉県教育振興財団

大谷弘幸・諸墨知義編1999『君津郡市文化財センター年報』No.16　財団法人君津郡市文化財センター

太田文雄・安井健一1994『石揚遺跡－手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(『千葉県文化財センター調査報告』第255集)千葉県教育委員会

太田文雄・矢本節朗1992『上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長遺跡－横芝工業団地埋蔵文化財調査報告書－』(『千葉県文化財センター調査報告』第213集)千葉県企業庁

岡本東三・堀越正行・渡辺修一・石橋宏克・宇井義典・山田敏史・戸谷敦司・大谷克己・鈴木　茂・平田和明・山形秀樹2001『千葉県史編さん資料　成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』千葉県

小久貫隆史ほか1999『市原市市原条里制遺跡－東関東自動車道(千葉富津線)、市原市道80号線埋蔵文化財調査－』(『千葉県文化財センター調査報告』第354集)日本道路公団・市原市・財団法人千葉県文化財センター

小久貫隆史・渡辺修一・新田浩三2002『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書10－袖ヶ浦市台山遺跡－』(『千葉県文化財センター調査報告』第435集)日本道路公団・財団法人千葉県文化財センター

小沢洋1998『千葉県木更津市　千束台遺跡群発掘調査報告書 IV　塚原22号墳・62号墳　塚原遺跡(22号墳墳丘下区域)』木更津市教育委員会

小高春雄ほか2006『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書8－富津市岩坂大台遺跡・水神 B 号横穴群・町田遺跡・花輪上原遺跡・上一ノ原遺跡・関山やぐら群－』(『千葉県教育振興財団調査報告』第541集)東日本高速道路株式会社・財団法人千葉県教育振興財団

鬼澤昭夫・荒井世志紀2006『志摩城跡・二ノ台遺跡 II』(『(財)香取郡市文化財センター調査報告書』第100集)千葉県香取農林振興センター・多古町・財団法人香取郡市文化財センター

神野　信2003『千葉県安房郡富山町　吉井遺跡－一般農道整備事業平群地区埋蔵文化財調査業務－』(『財団法人総南文化財センター調査報告』第48集)千葉県館山土地改良事務所・財団法人総南文化財センター

木内達彦編1987『千葉県佐倉市　高崎新山遺跡発掘調査報告書』(『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書』第9集)印旛郡市広域市町村事務組合水道企業部・財団法人印旛郡市文化財センター

喜多裕明2011『千葉県印西市　道作1号墳(第2次)・馬場遺跡第5地点(第1次・第2次)』(『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書』第295集)印西市

木對和紀1987『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』(『財団法人市原市文化財センター調査報告書』第20集)平和農産工業株式会社・財団法人市原市文化財センター

木對和紀・星野敬吾・平田和明2010『市原市台遺跡　C 地点』(『市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第12集・上総国分寺台遺跡調査報告 XXII』)市原市教育委員会

栗田則久・中道俊一・新田浩三・安井健一2006『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書5－鹿島台遺跡(A 区・D 区)－』(『千葉県教育振興財団調査報告』第529集)東日本高速道路株式会社関東支社・財団法人千葉県教育振興財団

湖口淳一1997『千葉市原町遺跡群発掘調査報告書 III　根崎遺跡』千葉市原町第三土地区画整理組合

越川敏夫1985『高宮台遺跡発掘調査報告書』高宮台遺跡調査会

小林清隆1985『栄町大畑 I-2遺跡　県単道路成田安食埋蔵文化財調査報告書』千葉県土木部・財団法人千葉県文化財センター

小林清隆1998『木更津市水深遺跡－岩根待機宿舎埋蔵文化財調査報告書－』(『千葉県文化財センター調査報告』第347集)千葉県警察本部・財団法人千葉県文化財センター

小林　嵩2022『千葉市作山古墳群(第2次)－宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書－』公益財団法人千葉市教育振興財団

小林　嵩・岸本高充・吉原大河2020『千葉市種ヶ谷津遺跡(第5次)－廃棄物(木くず)中間処理施設の拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』株式会社グリーンアース・公益財団法人千葉市教育振興財団

小林信一・太田文雄・小宮　猛2005『印西市西根遺跡－県道船橋印西線埋蔵文化財調査報告書－』(『千葉県文化財センター調査報告』第500集)独立行政法人都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・財団法人千葉県文化財センター

佐久間豊・関口達彦・倉内郁子編1990『千葉東南部ニュータウン17－高沢遺跡－』(『千葉県文化財センター調査報告』第175集)住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部

佐倉市大崎台B地区遺跡調査会編1987『大崎台遺跡発掘調査報告 III』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会

蔀　淳一1990『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』千葉県教育委員会

島立　桂・石渡典子2007『千葉県山武郡横芝光町　長倉宮ノ前遺跡－国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書 IV－』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第92集)千葉県道路公社・財団法人山武郡市文化財センター

菅谷通保編1993『千葉県長生郡長柄町　下久保遺跡』(『(財)長生郡市文化財センター調査報告』第19集)第一御幸物産株式会社・財団法人長生郡市文化財センター

菅谷通保ほか2003『千葉県茂原市　下太田貝塚－かんがい排水事業(排水対策特別型)新治地区埋蔵文化財調査業務－』(『財団法人総南郡市文化財センター調査報告』第50集)千葉県茂原土地改良事務所・茂原市・財団法人総南郡市文化財センター

杉原荘介・大塚初重1974『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』(『明治大学文学部研究報告』考古学第4冊)明治大学文学部考古学研究室

関口達彦・大内千年2005『千葉東南部ニュータウン32－千葉市小金沢古墳群2－』(『千葉県文化財センター調査報告』第514集)独立行政法人都市再生機構千葉地域支社・財団法人千葉県文化財センター

高梨俊夫1998『茱萸ノ木田遺跡－ほ場整備事業(団体営一般)来秀地区に伴う埋蔵文化財調査－』(『鴨川市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告』第5集)来秀土地改良区・鴨川市遺跡調査会・鴨川市教育委員会

高谷英一1995『千葉県佐倉市　白池台遺跡　西御門荒生遺跡A地区　西御門荒生遺跡B地区　ちばリサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査(1)』(『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書』第90集)財団法人印旛郡市文化財センター

武部喜充編1986『荒追遺跡群発掘調査報告書』荒追遺跡群調査会

田中英世・中山貴正2003『千葉市平和公園遺跡群Ⅰ　多部田貝塚　貝殻塚遺跡　ムグリ遺跡』千葉市教育委員会・財団法人千葉市教育振興財団

田中英世・簗瀬裕一・菊池健一・湖口淳一・佐藤順一1987『千葉市　子和清水遺跡　房地遺跡　一枚田遺跡』千葉市教育委員会・財団法人千葉市文化財調査協会

田中万里子ほか2008『境貝塚・山ノ台遺跡・儘田台遺跡・殿部田古墳群』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第101集)芝山グリーンヒル株式会社・パシフィックゴルフプロパティーズ株式会社・財団法人山武郡市文化財センター

田村　隆・加納　実・高柳圭一・豊田秀治・半澤幹雄1996『市原市武士遺跡1　福増浄水場埋蔵文化財調査報告書』(『千葉県文化財センター調査報告』第289集)千葉県水道局・財団法人千葉県文化財センター

田村　隆・小林清隆・石本俊則・渡辺修司・吉田直哉・青木幸一・八塚信行・大内千年・本多昭宏・阿部伸一郎1994『千葉県東金市・大網白里町　大網山田台遺跡群 I』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第16集)株式会社エルカクエイ・東急建設株式会社

常松成人・中野修秀2007『千葉県八千代市　浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡　八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』八千代市辺田前土地区画整理組合

寺門義範編1979『千葉県夷隅郡　大多喜町堀之内上の台遺跡－房総半島における縄文時代晩期遺跡の研究－』千葉県夷隅郡教育委員会

寺門義範・小川和博・横田正美1993『土気南遺跡群 IV　弥三郎第1遺跡　文六第1遺跡　文六第2遺跡　文六第3遺跡』千葉市土気南土地区画整理組合・財団法人千葉市文化財調査協会

當眞嗣史・井上　賢・西原崇浩・鳥海　章1998『千葉県袖ケ浦市　山王台遺跡・下向山遺跡－平成9年度袖ヶ浦市不特定遺跡発掘調査－』袖ヶ浦市教育委員会・財団法人君津郡市文化財センター

豊田秀治・小笠原永隆・吉野健一2000『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書5－市原市中伊沢遺跡・百目木遺跡・下椎木遺跡・志保知遺跡・ヤジ山遺跡・細山(1)(2)遺跡－』(『千葉県文化財センター調査報告』第383集)日本道路公団・財団法人千葉県文化財センター

中西克也・中野修秀1985『東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡　滝・木浦 II 遺跡発掘調査報告書』東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡調査会

中野修秀1995『千葉県芝山町　居合台遺跡』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第26集)愛時資株式会社・財団法人山武郡市文化財センター

中野修秀2000『沓掛貝塚遺跡－金谷郷遺跡群 III －』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第67集)株式会社ゴールドバレーカントリークラブ

中野修秀2001『上引切遺跡－金谷郷遺跡群 V －』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第74集)株式会社ゴールドバレーカントリークラブ

中野修秀ほか2003『池田丸山・山荒久・沖荒久遺跡』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第80集)株式会社ゴールドバレーカントリークラブ

西川博孝ほか2011『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書13－君津市鹿島台遺跡(B 区)－』(『千葉県教育振興財団調査報告』第653集)東日本高速道路株式会社関東支社・財団法人千葉県教育振興財団

西口　徹2004『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書3－芝山町上宿・井森戸遺跡－』(『千葉県文化財センター調査報告』第469集)千葉県企業庁・財団法人千葉県文化財センター

西野和廣・柿沼修平・川端弘士・川端結花・田中英世2022『千葉県八千代市　島田込の内遺跡 d・e 地点発掘調査報告書』合資会社 SHT 八千代・有限会社原史文化研究所

西野雅人2007『千葉東南部ニュータウン37－千葉市六通貝塚－』(『千葉県教育振興財団調査報告』第527集)独立行政法人都市再生機構千葉地域支社・財団法人千葉県教育振興財団

新田浩三・城田義友・大久保奈奈2019『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書34－成田市大安場 I 遺跡・辰巳ケ入遺跡・大安場 IV 遺跡・大安場 V 遺跡・水の上 I 遺跡・一坪田入 II 遺跡・夜番 II 遺跡・夜番 I 遺跡－』(『千葉県教育振興財団調査報告』第776集)東日本高速道路株式会社・公益財団法人千葉県教育振興財団

能城秀喜1994『－千葉県木更津市－林遺跡 II　道路改良工事(市道145号線)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 III』(『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第86集)木更津市・財団法人君津郡市文化財センター

蜂屋孝之・大谷弘幸2021『市原市市原条里制遺跡－(仮称)スポレク健康スクエア用地管理事業埋蔵文化財発掘調査報告書－』(『千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告』第38集)千葉県教育委員会

蜂屋孝之・小橋健司1999『山田橋表通遺跡』(『財団法人市原市文化財センター調査報告』第28集)市原市土木部街路課・財団法人市原市文化財センター

半田堅三2003『市原市台遺跡 B 地点』(『上総国分寺台遺跡調査報告 X』)千葉県市原市教育委員会

平山誠一1997『森台遺跡群(北野支群)』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第40集)出光興産株式会社

藤下昌信・寺内博之・喜多圭介・藤原均1984『成田市郷部北遺跡群調査概要(加定地・殿台遺跡)』成田市郷部北遺跡調査会

松本　勝2016『千葉県木更津市　請西遺跡群発掘調査報告書 XV －大山台遺跡－』木更津市教育委員会

三浦和信・小宮猛・橋本勝雄1987『沓掛貝塚』千葉県土木部

道澤　明2005『芝崎遺跡Ⅰ－住宅宅地関連公共施設等総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査－』(『財団法人東総文化財センター調査報告書』第30集)千葉県海匝地域整備センター・財団法人東総文化財センター

光江　章2002『－千葉県君津市－坂畑南遺跡』(『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第177集)財団法人君津郡市文化財センター

峰村　篤・須賀博子2016『上本郷遺跡第8・15・16地点発掘調査出土資料報告書(2)』(『松戸市文化財調査報告』第62集)松戸市教育委員会

三宅　慶・喜多裕明2022『令和2年度　四街道市内遺跡発掘調査報告書』四街道市教育委員会

武藤健一ほか2003『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成14年度』八千代市教育委員会

安井健一・伊藤智樹2018『南房総市岡町遺跡－広域営農団地農道整備事業(安房2期地区)埋蔵文化財発掘調査報告書－』(『千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告』第27集)千葉県教育委員会

簗瀬裕一2001『千葉市源町遺跡群－高津辺田遺跡・南屋敷遺跡－』源町第二土地区画整理組合・財団法人千葉市文化財調査協会

山口直人・吉田直哉・稲見英輔・木川浩司1999『千葉県山武郡山武町　鷺山入遺跡』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第57集)山武町

山田貴久・田島新・西野雅人・小笠原永隆・平本嘉助・小宮孟・西本豊弘・小林園子・伊藤利枝・永嶋正春・高橋直樹1998『千葉東南部ニュータウン19－千葉市有吉北貝塚1（旧石器・縄文時代)－』(『千葉県文化財センター調査報告』第324集)住宅・都市整備公団・財団法人千葉県文化財センター

吉野健一2006『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書7－君津市三直貝塚－』(『千葉県教育振興財団調査報告』第533集)東日本高速道路株式会社関東支社・財団法人千葉県教育振興財団

渡邊高弘編1991『主要地方道成田松尾線 VI －芝山町小池地蔵 II 遺跡・宮門遺跡－』(『千葉県文化財センター調査報告』第192集)千葉県土木部

渡辺修一1991『四街道市内黒田遺跡群－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』(『千葉県文化財センター調査報告』第200集)千葉県住宅供給公社・財団法人千葉県文化財センター

渡辺修一1996『浅間台遺跡』(『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第34集)松尾町

渡辺修一・矢本節朗・横山仁・糸川道行・今泉潔1994『四街道市御山遺跡(1)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』(『千葉県文化財センター調査報告』第242集)住宅・都市整備公団